

絵の雰囲気を伝えている。クラシックな絵なのだろう。

鳥賊リングたまねぎフライまるいものまるい音や
においの夕食

東條尚子

桃

他にどんなまるい食物があるだろう。目玉焼きの黄身、ハム、大根の輪切り……、多少は思い浮かぶが、そんなどたくさんはないはずである。ということは、今日の夕食は特別な夕食と言つていいだろ。特別な夕食なので、音や匂いに敏感になつていいのだ。

金色のどうもろこしは茹であがり湯気ごと運ぶ夏の
卓袱台

森屋めぐみ

茹でたての玉蜀黍がのつた皿。盛大にあがる湯気をそのまま卓袱台まで運ぶ場面。「卓袱台」がレトロなイメージを呼ぶ。四句切れと見れば誤りではないが、やはり、結句「夏の卓袱台」と「へ」がないと落ち着かない。

貪りてうつしみ深く沈めたり捨身菩薩の白桃一顆

佐々木寛子

「うつしみ深く沈めたり」とは、わが現し身の奥に沈めた、つまりすっかり食べたの意味。見事な白桃を讃える白桃讃歌である。

親鳥がひな鳥に渡す餌のよう小型機に乗り換える私は

武藤義哉

大型機のそばに待つていた小型機にそのまま乗り換えた場面。飛行機はもともと鳥を真似しただけあって、なるほど、言われてみると鳥の親子によく似ている。意外

な見立てに感心した。

五枚ある花びらが散りおんぼろの愛車で父が運ぶ白桃

鄭賢鮮

すぐ前の作で、白桃の収穫時の作とわかる。韓国の白桃の収穫がどのようなものなのか私には分からぬが、昔の映画の一シーンのような、なつかしいその場面の雰囲気が読める。釜山で一人がんばつて作歌している作者。期待したい。

もう何度も歩いただらう小児科へ続く廊下に増える折り紙

中川弘子

長期にわたって小児科へ通つておられるのだろう。廊下に飾られている折り紙を見るたびにそのことがしづんに思われる所以である。折り紙は、入院中の子供たちが折つた折り紙作品だろう。「歩く」「続く」「増える」という動詞が強くひびいて、作者の思いをうまく縁取つている。

朝の窓あけて部屋へと迎えたり遠き鶴のかすかな声

松橋雅実

一読した後、不思議な静かさが伝わってくる一首。本当に闇が私たちの周辺になくなつてしまつたように、本当の静寂も現代のわれわれの身近から消えてしまつたような気がしてくる。